

エジプト駐在武官

日誌(1)

榊枝 宗男 陸自75

中東の大国エジプトは、「エジプトアラブ共和国」が正式な国名である。

最近では、2012年の「アラブの春」で当時のムバラク大統領を国民と旧勢力が排除し、2年後、国民に支持された軍の最高司令官シーシが新大統領に就任し、話題となったことは記憶に新しい。

しかし4500年の歴史を有するエジプトにおいては、これもほんの些細な政変の一つとして、歴史に刻まれるものだと思われる。

私は25年前、このエジプトに駐在武官として赴任した。そこでの小さな経歴を紹介する。

飛行機から見た夕暮れ時の首都カイロは、ビルや小さな住宅、そして道路などすべてが、砂漠色だった。

着陸後に旅客機の扉が開くと、気温45度の外気が一気に押し寄せ、気の遠くなるような暑さと、乾いた熱風で息

苦しさを覚えた。4半世紀も前、家族5人にとって、初めての海外赴任であった。当時、中2の長女を頭に、長男、二男にとって最初の外国がこのエ

ジプトになった。

カイロ空港は、丁度、聖地メツカからの巡礼者を迎える何百人ものアラブ人家族で溢れていた。出迎え者の後ろ姿を追って、喧騒なアラビア語の飛び交う通路を、手荷物を乗せた重いカートを押しながら、ようやく空港ビルの出口までたどり着いた。

荷物の掌握もさることながら、妻と子供たちに新しい任地の生活で余計な不安をかき立たせないよう、振る舞おうとする気持ちで精一杯だった。

空港からホテルまでの車中、現地生活での注意事項、「水道水の飲用は駄目」、「生野菜、アイスクリームも絶対駄目」、「水たまりに手足を入れるな。恐ろしい住血吸虫症になる」、「外出時は帽子サンングラスを」などなど聞くにつれ、東京では考えられない環境と覚悟していたものの、一同嘩然とした。

また、ホテルへ向かう途中の交通事情は、片側3車線の道路を車が横5列になり、フルスピードで走っている。

しかも、多くの老人や子供の歩行者たちも、平然と車の間隙を巧みにくぐり抜け横断して行く。

この間、妻と私は右足を踏ん張って目をつぶること度々であり、小6の長男が「ホテルに着くまで20人ぐらい跳ね飛ばしそうになったよ」と、興奮しながら話していた。ここは、日本式の

歩行者優先が通用しないのだ……。

翌日から、異常な熱波がカイロ地方を襲い、気温が50度を超え、天気はいつも雲一つない晴天となった。日本から携行した5本の傘を、3年間一度も開くことはなかった。

つい先週、長男36歳・会社員が、社員旅行で22年振りにエジプトを旅した。社員12名のグループの案内役になったのは勿論で、彼がまず訪問したのはピラミッドの隣にある母校・カイロ日本人学校であった。

長男も、私以上にエジプトを懐かしく思っている。わが家のアナザー・スカイはエジプト・カイロであろうか。

これから回を追って、わが家のアナザー・スカイのエジプトを、時間と空間を超えて紹介するつもりである。



カフラー王のピラミッドとスフィンクス